日刊 動労千葉
79.11.24
No. 283
国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二-一八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四三（22）七二〇七

三里塚・ジェット闘争貫徹！「国鉄35万人体制」粉砕！

明白な『本部』反動 暴力分子の路線・方針の誤り

11・21おしかけ〝オルグ〟の破産！

本紙前号で既報のとおり、「本部」反動暴力集団は、動労本部青年部の名を僭称し、ひさかたぶりの全国動員をもって動労千葉各支部へ組織破壊〝オルグ〟をかけてきました。その〝オルグ〟の実態を再度明らかにして「本部」反動暴力分子の本質を見たいと思います。

変らない「本部青年部」の暴力的体質

幕張支部に対しては4・11錦糸町駅襲撃事件のように弁護士をひきつれ、暴力的に職場への乱入を図り、幕張支部組合員の固いスクラムの前に軽くはね返され、寒空の下庁舎の外でうちふるえ30分で引きあげざるを得なくなり、カッコがつかなくなった反動分子は、またまた、自らの暴力はタナに上げて「千葉が暴力をふるった」と当局に泣きつく仕末です。また肩すかしを食わされた支部では、及び腰で反動暴力集団の本性を押し隠し、作り笑顔で「ごくろうさま」とデマビラを配り〝オルグ〟しようとしても誰一人として相手にされず消耗感と寒さにふるえて早々と退散するというブザマな姿をさらけだしたのです。こうして動労千葉の整然とした闘いによって「本部」反動暴力集団の全国動員をもってする組織破壊策動は完全に破産しました。

各支部で何の「成果」もあげることができたかった消耗感をそのままむき出しに、ヤケクソ的に東千葉駅ホームに集められた二〇〇名の動員者は「30分待てば上り列車が来る」ということを唯一の希望に、自己の行動に何の確信も持てないみじめな集団の姿をさらしました。革マル分子の村上、室井（東京）、島田、三浦（新潟）などがホームをかけまわってケシかけても、指揮者・伊藤（「本部」青年部書記長）の消耗感丸出しの指揮の前に、動員者は顔を伏せ、首うなだれるばかりだったのです。

この間、「本部」反動暴力分子は機関を暴力で牛耳り、セクト的方針をムリヤリ押し付けてきましたが、そのことに断固対決した動労千葉の闘いに対し、メチャクチャな「千葉地本排除」をもって臨み、3・30結成大会をもって決然と立った動労千葉に対しては「ツブレるのは時間の問題」などと言っていました。

しかし、七ヶ月の激闘を経た今、たった七名のスパイと私利私欲分子しか囲い込めず、「セクトの暴力団詰所」と化した　千葉事務所に多額の組合費を注ぎ込み、その維持にキュウキュウとしている反動暴力分子と、10・22～11・1の闘いを万全に闘い抜いた動労千葉の対比はあまりにも鮮明ではありませんか。

〝オルグ団〟に接した各支部組合員は「ツブレるのは『動労本部』だ」という確信をますます強めています。

全国に拡大する動労千葉の闘い

「本部」反動暴力分子の「水本」「安定宣言」「三里塚敵対」の路線が全くセクト的なものであることは、この間、動労内外の全国の労働者の間で知らない者はたく、その反動的、犯罪的方針に怒りの声がわき上っています。

この路線的誤りの故に、地域でも職場でも孤立するばかりの反動分子はなおさらに焦り、暴力的な動労千葉破壊策動に走らざるを得ないのですが、これは「本部」反動分子の「末期的症状」以外のなにものでもありません。

動労千葉の路線的正義性と、正しい路線を断固守り抜いて闘い、闘い抜くことを通して組織強化をかちとってきた取り組みは、いまや全国の多くの労働者・人民から「動労千葉のように闘おう」という大きな潮流を創り出しつつあります。

自信と確信をさらに深め、労働運動の原則に踏まえた闘いをさらにおし進めてゆこう。

「ツブレるのは『動労本部』だ！」
＝動労千葉組合員の感想

われわれはこの11・21おしかけ〝オルグ〟団の「動労青年部」の姿に、今日の「動労本部」の実態を鮮明に見ることができます。

自らの運動に強い確信をもっている動労千葉組合員に対し、「水本」と「千葉再建」に路線的にも心情的にも全く確信をもてず、ただただ「組合指令だから」ということだけで出てくる動員者の全く対照的な姿です。

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！